## ■ 特別講演1

## 21世紀の東洋医学

高久 史麿(自治医科大学学長)

1990年代になってComplementary Alternative Medicine (CAM) が世界的に注目される様になった。アメリカでは42%の医師がCAMを用いていると報告されている。しかしCAMを服用している患者はしばしば医師にその事を報告していない事が問題になっている事から考えて、アメリカでの利用率は実際にはもっと多いのではないかと推察される。因みにオーストラリアでは46%、韓国では64%、日本では76%と言う数字が発表されている。

我が国の漢方薬の特徴は健康保険が適用になっている事である。従って上述の日本の%は実際の値に近い ものであろう。この様に我が国では数多くの患者が漢方を服用している。因みに自治医大卒業後地域で診療 に当たっている医師を対象にした調査では、日常診療に漢方を取り入れている卒業生の割合は積極的に取り 入れている28%を含めて頻度の相違はあっても全体として94%と言う高い値になっている。又卒後20年以上 経っている卒業生と20年未満の卒業生とで漢方薬使用の頻度を比較してみると、20年以上の者は98%。20年 未満のものは91%と臨床経験を積み重ねるにつれて漢方薬をより多く使用する傾向が認められている。この 調査で卒業生が漢方薬を使う理由としてあげているのは、西洋医学では対応できない症状に対してと言うの が一番多い。自治医科大学の卒業生の間で漢方使用の頻度が高いのは、恐らく卒業生の多くがへき地を含め た地域の第一線で診療に従事しており、当然様々な症状を訴える高齢の患者が多い為であろう。その中でも 倦怠感、原因不明の疼痛、不眠、胃腸障害等自覚症状を中心とする諸疾患に対して漢方薬を使用する場合の 多い事が推定される。上述の自治医大の調査によると、この他患者本人の希望、薬の数が減らせる、証があ えば効果がある、等が漢方薬を処方する理由として挙げられている。証に基づいて漢方薬を使用するのが東 洋医学の王道であると考えられるが、実際に証に基づいて漢方を処方している医師は少数で、大多数の医師 は西洋医学の発想の下での漢方薬の投与、即ち漢方薬の病名投与を行なっていると推定される。この様な漢 方薬の病名投与ではその投与の科学的根拠を示す事、即ちEBMが求められる。漢方薬の病名投与のEBMに 関しては既に数多くの臨床研究がなされているし、又digitalis,artemisinin等薬草由来の薬剤が西洋医学で広 く用いられている事は周知の如くである。

漢方薬の特徴として挙げられている事に『未病を治す事』と並んで『個の医学』が挙げられている。その意味では漢方医学は現在話題になっているtailored medicineの先駆者と言う事が出来るであろう。そのtailored medicineとしての漢方医学に求められる事は証と病名とを組み合わせた漢方薬の投与である。しかしながら証に関しては漢方医学の骨格を成すものではあるが、東洋医学を専門とする医師以外にはわかりにくい。従って、個の医学としての漢方医学が世界的に広く用いられる様になる為には漢方薬の病名投与のEBMを明らかにすると同時に、東洋医学の証に関する科学的な根拠を明らかにし、証と病名とを組み合わせた個の医療法を開発する必要があるであろう。

## 略歴

昭和29年3月	東京大学医学部医学科卒業	昭和61年4月	東京大学評議員(昭和62年3月迄)
昭和30年3月	東京大学医学部付属病院にてインターン修了	昭和61年5月	文部省高等教育局科学官(平成2年3月迄)
昭和30年6月	東京大学医学部付属病院冲中内科研究生	昭和62年9月	東京大学医科学研究所教授(病態薬理)兼任(平成
昭和30年9月	医師免許取得		2年3月迄)
昭和33年4月	群馬大学医学部助手	昭和63年4月	東京大学医学部長(平成2年3月迄)
昭和34年6月	「赤血球内遊離プロトポルフィリン値」の論文に対	平成2年4月	国立病院医療センター院長
	し医学博士授与		東京大学第三内科教授
昭和35年1月	東京大学医学部助手として東京大学冲中内科に勤務		自治医科大学副学長(非常勤)兼任
昭和37年1月	助手を退職	平成2年12月	東京大学第三内科教授退官
	国際原子力委員会留学生としてアメリカ合衆国シカ	平成5年10月	国立国際医療センター総長
	ゴ大学に留学	平成7年5月	東京大学名誉教授
昭和39年8月	東京大学医学部助手	平成8年4月	自治医科大学学長
昭和47年4月	自治医科大学内科教授		国立国際医療センター名誉総長
昭和57年7月	東京大学医学部第三内科教授	平成16年4月	日本医学会会長 (兼任)